

3 まつり

飯島 八坂神社のまつり

飯島近くの神社祭りとしては、真田神社（7月9日）、与一さんの祭り（8月23日）があり、たいそうな賑わいで、見物人は平塚から歩いてきたものだ。

神奈中のバスが開通してからは、平塚から臨時便が出た。お化け屋敷やささまざまな店が並び楽しかった。木間さんの店では、祭りになると金目川に張り出しの店を構え、氷の販売もやっていた。

飯嶋の八坂神社は、平成7年4月20日に放火され、古いお社は全焼してしまった。現在のお社は、平成9年3月に旧お社と同じ場所、同じ大きさで再建された。ご神体は、焼失を免れ、一時お社再建まで八幡宮に安置された。

### 八坂神社のお祭り

9月7日が祭日、この辺りでは有名で、多くの人が集まった。祭日には歌舞伎芝居が演じられ、厚木からと市川某の一座という二つの興行があった。

芝居は一晚のみだったが、呼ぶのにお金がかかり、小さな集落だったのでまけてもらった。屋根に上っての見物客もあり、舞台は東の田に張り出して組み立てた。晩方の興行だったので、夕涼みがてら多くの人たちが集まり、えらく賑やかだった。

役者の風呂水は川からくみ準備した。

役者や太鼓応援者には、握り飯、煮しめなどの食事を用意した。煮しめはお椀で、また、サラリーマン家庭はお菓子を提供するなど、各家の事情に合わせた食べ物を子供たちが集めて回った。

戦後には、青年たちの素人演芸として、芝居や踊りを演じた。南原の大和屋ジュウザブドウを呼び、演技を教わり練習した。総出で「やくざ踊り」や芝居をし、他の村からの飛び入りが、踊り、とにかく賑やかだった。素人演芸は3・4年続いた。これを機会に他の村の人たちと結ばれたカップルも大勢いた。

焼失から残された、舞台の組み立て材の一部は、自治会館を建築する時に利用した。あとは社殿と共に焼失してしまった。幟を立てるケヤキの木枠や支えも焼失したが、牡

丹の彫り物が施された実に秀逸な品だった。

大人の神輿は、担いだ記憶はない。我々より十歳上ぐらいの人たちが担いだかもしれない。親からもその話はなかった。神輿はお宮の西側の藪に置かれていたのは、覚えている。

太鼓は、他の村から応援があり、寺田縄の太鼓は昔からの付き合いだった。

## 道祖神とまつり

木間商店の脇で、秦野街道と私道の間「大きなエノキ」があって、南側の根元、飯島集落の入口に一基あった。車が衝突し、平成元年に再建した。

石柱の<右>には「交通安全」の刻みを彫りこんである。傷められた古い道祖神は現在の石柱の元に置かれている。もう一基の道祖神は、飯島から養護学校に通ずる道と南北に交差する道の北東角地にあった。現在、石碑がどこにあるか不明。

はしかの時には、棧だわらをもって、セイノカミサンにお参りした。

道祖神の祭りは、木間さん宅脇にお仮屋を組み、秦野街道に行く人たちを止め、「疱瘡も軽く、はしかも軽く、悪魔払い」、「めってけ、めってけ」と大声をかけ、お神酒をついで、知らない人からも賽銭を貰った。

下級生は一生懸命やらないと上級生に怒られた。集まったお金は、高等科が親分になり分配した。学年の上から沢山の金額を取り、順に分けられた。

どんど焼きは金目の川原に降りてやった。集落から集めた正月飾りや煤払いの竹を組み、わらを足して大きなサイトを作り、燃やした。

遊びの中でもそうだが、集落のガキ大将が集団をまとめていた。けんかしても上が収めた。そういう統率が自然と出来ていた。日常生活でのまとまりは、

学校教育にも反映されていた。道祖神の祭りは、男の子の祭りだった。戦後になって途絶えてしまった。

## 寺田縄 日枝神社のまつり

山王社との名称は、明治になって日枝神社と改称した。

ご神体は「風土記稿」に「木像 五寸」と記されているが、「石」だと思う。見た人はいないが、霊験あらたかのもので、見るものではない。

神主さんは、伊勢原の大神宮から、平塚八幡宮に変更になった。いろいろな経緯があったようだ。八幡宮が担当するようになって、鯛などの生ものが供物として奉げられたのには、戸惑ったが、さまざまなしきたりがあるものと感じた。

米が取れない不景気な時には、神輿を出すことを自粛した。若い衆は、毎年担ぎたくて、お宮の寄り合いなどで「神輿は担ぐためにある」など、強い意見を主張し、意見が通り経費は若者の工面ということで担ぎ出したこともあった。

当時の青年会は、消防、水防等多方面を担当し、活躍し、村の原動力となり地域活動の主役だった。

神輿の世話役は、当時の地主が担った。

日枝神社のまつりは4月3日・4日で、なぜか雨になることが多かった。親戚の人たちも遊びに来るので、ガッカリしてしまった。「雨しごく」と言い、とにかく雨になった。その後は、お蔭さんで天気が続き幸せになったと喜んでた。

まつりには、全部の親戚が遊びに来て、家が一杯になるくらいだった。ろくな御馳走はなかったけれども、皆が集まるのが楽しみだった。まつりと節句が同じだったので準備に大忙しだった。

平塚から役者を呼び、芝居が掛った。シバヤシ（芝居の役者）は、昼間の公演の時には、辺りが明るく、化粧などの「あら」が見えて困ると云っていた。出し物は、子供が父と別れたりする、泣かせる、涙ものが多かった。

役者の食事は、村の役員や青年団が各氏子宅からお煮しめ、お赤飯、巻きずし、いなりずしなどを集めた。甘酒などもあって御馳走がいっぱいで、食べきれなかったようだ。

参道には露店がならび、ヨーヨー、金魚すくい、あめやお菓子の「一文がし」が売られていた。露店が沢山で、神輿の宮出しが大騒ぎになるくらいだった。

まつりの当日は、学校が早く終わり、買い物をしたり、芝居を見たりした。小遣い銭はわずかで、兄妹が大勢だったので、それぞれが別々の菓子を買って、交換しながら、

芝居見物をした。

お宮の境内は人でいっぱいになるほど賑わった。他の村から見物に来たし、自分達も親と一緒に家中で他所のまつり見物に行った。南原のまつり、遠くは須賀の親戚へ、とにかく、おまつりと芝居が楽しかったし、楽しみだった。親からは、「よく働けよ、芝居に連れて行くから」といわれていた。

当時は、平塚の映画は高くは見られなかった。平塚へのバスは一時間に一本、たいていは歩いて行った。バスに乗ると「あの家は金がある」と評判になった。

お神輿は豊田のより小さかったが、青年団が「ごせんごさん」といって、大きくなった神輿を喜んで担いでいた。遠くは、飯島近くまで練り歩いた。

日枝神社の鳥居は、大正8年に作られ、神社は遊び場でもあった。縄跳び、かくれんぼ、ブランコがあった。

## 入野 八坂神社のまつり

村の鎮守である牛頭天王社は、明治になり八坂神社と改称された。本殿の右には末社が祀られている。神社の屋根を葺き替えの時（昭40年代）に、予算が余り改修した。

山王社、蔵王社の所在は、分からない。

鐘楼（宝永3年新造）は、戦争の時（昭和18年か）に供出した。

本殿右の鉄製の祠に神明社を祀る。

村民持ちの山王社が記録されているが、所在は不明。

祭礼は、6月14日であったが、一時、4月2日に変更され、雪が降ったりした。その後、4月20日に変更され、10年間ぐらい続けた。雨のこともあった。現在は、サラリーマン、育成会の意向が強く、4月の第一日曜日に実施している。

かつて、祭り日の変更は、県知事の許可が必要だった。

神輿を神社から天王道通り、金目川の辺りまで渡御した。金目川に下りて禊を行なうが、当時、川には一本橋が架けられていたし、民家は無かったので対岸には渡たらなかった。

一本橋が架けかえられ、神輿は、水神橋を渡り、川に下りて「浜降り祭」のように禊

を行った。まつりの時、天王道には「のぼり」が7本立てられた。天王道は、曲がりくねり、今の倍くらいの長さだった。

祭りが終わると、皆、がっかりし、一週間ほど気落ちしてしまう程、精魂込めた。当日は、他に出ていた人達が帰り、親戚も来て、金目、大野、吉沢からも見物があり、賑わいはひとしおであった。

揃いの法被の用意し、親戚へのもてなし等個人的な出費がかさんだ。

## 神 輿

寒川町西岡田村の八坂神社から貰い受けた、飾り神輿である。入野の祭りが雨で延びると、寺田縄神輿と部落境で鉢合わせになり、やりあうこともあった。寺田縄の神輿は大丈夫だったが、入野は、飾り神輿なので分が悪かった。

毎年出されなかったが、毎年担ぎたくて、青年団は、1・2ヶ月間、会議をして、部落にお願いに上がったこともあった。

太鼓の櫓は、今井板金さん側に組み、道路に掛かったが皆がよけて通行した。

7・80軒の部落だが、神輿は、入野出の者だけが担ぎ、4・50人程だった。神社でのお祓いの後、羽織袴姿の神主とともに町内を練り歩いた。町内6ヶ所（小名）の休み場所では、村から、お神酒・赤飯・煮しめなどが半切（底の浅い桶）いっぱい用意された。

天王道は曲がりくねって今より長かったが、水神さんまで休みなく行き、途中、上原よしろうさんの畑で休んだ。

提灯は、戦後のことだった。天王道の幟は、大正、昭和期には無かった。

真田の天王さんの祭りは長蛇の列になり、国府祭（こうにまち・昭和43年までは、旧暦の5月5日の節句にあたる6月21日に実施されていたが、44年から新暦の5月5日に変更された。

国府まちの時、三之宮さんの神輿が片岡あたりを通るのが見えた。身なりは、白装束だった。建物が無く、水田だったので見通せた。

金田辺りは、今と違って行事も少なく、若い人たちの楽しみは、お祭りぐらいで、それはなかなか盛大だった。

祭りの時には、遠くに住まう親戚の者も5、6人、泊りがけで芝居を見に来る。家では、お客の接待をし、ごろ寝で夜遅くまで祭りの話や世間話にふけた。

来客の土産は、当時、貴重品の「砂糖」が中心だった。床の間にその砂糖を積み上げていた家もある。砂糖以外では、「前掛け」を持ってきたこともある。お酒は、地元の店で購入し土産物としては使われなかったようだ。

各家での祭りの準備は、女性が担当し、「お赤飯、煮しめ、なます」などを用意した。食材は、農家なので出来る限り家で取れる物を使い、今は、お金を出せばなんでも手に入るが、当時は自分達で調達した。子供や親戚と人数が多いので、準備は大変だった。

煮しめの材料は、里芋、にんじん、ごぼう、焼き豆腐、ちくわ、昆布などだった。今とは違い、主食として、このような物を食べていたほうが体は丈夫だった。

神楽や芝居を見たいので、夜ご飯を速く食べてお宮に集まった。神に奉げる神楽、芝居は歌舞伎の「先代萩」、「太閤記十段目」などであった。役者・芸人は、中原、柳町などから泊りがけで来た。寝泊りのための夜具、食事（おにぎり、煮しめなど）は係りの者が家々から集めて回った。

地元以外の祭り見物にも出かけた。たとえば、真田の天王さん、大磯の高麗寺山などに出かけ、小遣いは十銭～十五銭、それで桃、金魚、氷水を買って食べるのが楽しみだった。

入野では、各家がお宮さんに「お赤飯、煮しめ」をお供えした。お宮での残り物は、集めて豚を飼っていた農家に持っていった。

祭りには、必ず名物人の「河内のタケチャン」がやって来て、芸人でもないのに、芝居の幕引きをやっていた。どこかピント外れの所もあった人だが、幕引きは的を得ていた。話によると、日を間違えることなく各地の祭りに顔を出していたようだ。

入野の祭りは、村の委託を受けた青年会が仕切った。会のべいべいは神楽殿に寝泊りした役者の風呂炊きをした。青年会の役員は、威厳に満ち怖かった。「青年堂」があり、各種の会合に使ったが、座席は、役員が上席に陣取り、あとは年齢順に座る。序列がはっきりしていた。新米は掃除や近くのお店「もくさん」に酒タバコの買い出しに走り回った。

## 長持 熊野神社のまつり

まつりは、4月5日に行われていたが、今では、参加者の都合が優先されて4月の第1土曜日に変更された。

昔の神社は、大街道を背にして、右側に草屋根の会館があり、その奥に鐘楼があって、中央の一段高い所に本殿が建っていた。大きなケヤキの木が生えていて、遠くからの目印だった。本殿の裏にはサンゴ樹が植えられ、隣との境になっていた。周辺は田圃で、民家は一軒だったと記憶している。

神社にはお神輿がなかったけれど、御祭神が女の神様だからと聞かされ、納得していた。

太鼓が盛んで、まつりには欠かせなかった。太鼓連があり、特に青年団が中心となって十日ぐらい前から練習し、賑やかに太鼓の音が響き渡った。当時はそれがうれしく、うるさいという人などは誰もいなかった。

まつりになると、神社の境内に太鼓のやぐらや芝居小屋が設けられた。芝居は、市内の劇場でやっていた「十銭芝居」が掛かり、境内がいっぱいになるくらい人気があって、大勢の人たちで見た。早く行かないと座れなくなってしまうので、見やすい所を取るための陣取りをした。神楽も見た。

露店も出て、ニッキ飴、カルメやき、棒になった麦こがし、イカの足などが売られていた。小遣いは2・3銭だったので欲しいものを選んで買った。兄が買ってくれたこともあった。

まつりには親戚の人たちも子ずれで泊まりにきた。皆が集まるのでとても楽しかった。お土産には砂糖などを貰い、床の間に積み上げた。反物を貰ったこともあり、羽織が作られた。

お料理は、煮しめ、お赤飯、サバの煮付け等で、いつもは食べられないものが食べられ、うれしかった。

他の神社のまつりを見に行った。飯島、寺田縄、入野、それに南原のお諏訪さん、徳延神社などにも足を延ばした。友達と大勢で出かけた。他に娯楽がなかったのでまつり見物は楽しかった。

いつもの神社は、かくれんぼ、まりつき、あやとり、縄とび、石けり、ままごと等の遊び場だった。

まつりの後は、金目川の桜の花見、見事な花のトンネルになって、押され、押されの見物だった。お茶屋が店を開き、芸者さんの踊りも見た。

< 以 上 >